



辛亥

白字雷理後篇
くろううるて

全部五冊

書林賭春堂
崇高堂

門號
13
2007
年

宛委堂

卷

路 宇 雷 理



寃尔物有乍より 薄寃尔
あらが 圖乃あらや 深根も根
とも黒げ不捨 物藏こまく
尔たば称へ不足もじ 精

うるまく、やいえありけ
ひんめうと 因ふ滿うまうと
まつうあり

からまち盧橘庵素季に南
み大庾坐尔畫

粹宇留理卷之一

いざきのせんとたよつき々北ひの業寂僧教の
あくいまそううきふ行ぐの深仰とう或寂莫
よいびくともちくゑきききて。思見境としむ
きのとらづけ色が妙タもとせよしの物じ。
蝶の深むと歎れとふのほり平合もとすと
ぐをほくとてが。辰寅卯未と辰のとくとくと。

宇宙ノ星。日月。諸星のもの。其の形。位置。流速。の如
き。彗星のそれ。追跡。を。又。それ。あらじよ。なつりた。
う。而。深所。も。星。と。よ。す。の。ひ。も。土佐。よ。全。ゆ。る。前
す。か。ま。の。と。思。ひ。の。お。た。よ。あ。元。来。星。の。宿
あ。ふ。な。り。を。完。よ。う。か。側。の。日。乃。新。れ。漏。ゆ。う。そ。を
タ。ち。少。く。盛。へ。と。と。だ。又。の。夜。の。星。の。完。入。用。左。聲。だ。
勿。海。星。よ。大。小。の。き。い。が。び。ざ。ら。り。づ。け。ぬ。だ。ど。く。ま
え。先。か。き。て。あ。う。の。校。す。の。ま。と。り。、板。深。師。ほ。く。

や。を。う。と。と。と。る。い。星。す。で。見。一。造。化。の。う。み。う。不。易
あ。う。な。り。あ。わ。う。方。か。の。優。者。す。れ。ば。溶。せ。の。う。
た。と。く。一。後。の。世。繪。ふ。つ。で。や。

昭。代。の。化。は。や。あ。る。民。間。の。は。り。と。見。じ。や。と。南。と。も
よ。な。ぎ。し。と。べ。り。て。と。月。も。度。の。秋。津。洲。や。小。根。外。月
齋。べ。と。ら。こ。そ。と。と。れ。ん。便。く。も。の。と。で。ち。よ。が。今
この。活。ト。お。ま。ま。と。か。様。う。一。か。寶。幸。と。白。巣

宿すと下りてと嘆息とろぞあへ、流りへ不易の
ようなり故人も定められこと、人をもとへと云ふ
もとへどくまもりのとれどく、とゆくわど化
人が汝とちよ井戸の下直ぐらがよきだのむとひ、
玉と天神のそんもすう入夜きべ親もへ大師よきて
やし、坐磨の稻あよげそれなど、うちたの章不吉
の神仏よりあり内只との振うちとまでなり、
尔のをと振うちとみのやけんに、空祖文が

出来て木戸男の舟戸へ町櫛あよりも見ゆたり、
茅限の縫どおりがよしと袖口が、版の口内へすみ成
若戸纏はる舟の孫男の齧へ項よ筋女のよげを
寂よ有今核ノ一煮羹豆乳とほくほけ両手よ絞同
舟名のとあきり、強飯へと角よなう、接觸の焼羹
に角よ定まつて、大を鳥志書き出一醫師砂魚杓の
それよ餘仇名はれ、熟慮よ考みて、いづれの名へき
くじ。探査舟の舟板へ左右どりのやすよせねど、

りやうて後^{ロス}をとむの役者^{マトコ}れ居宅^{イマツ}の妓女^{ギヨウ}がよく是^{シテ}
居^ハ居^ハ下^トう^トよ^ハらとをみの^トな^リ一^ハ口^ハ一^キあ
のまうじの男^ハあいとひとひのね^ハく味^ミ猿^{マカ}さう^ハ祭^{マツル}る
皮^ハの^トちと裁^{カタ}た^ムも食^ヒ張^ハと^シうけ^ハ物^ハす^テ居^ハ
そ半^ハの^トひかと^シ寝^ハや^ハと^シあ^ハそ^ハれ^トと^シて^マで^ハ
枕^{カタ}よ^ハなる^マい^ハと^シ者^ハ見^ハじ^テの^シ事^ハド^シ三^ハ園^ハの^シ景^ハ
かの^シの^シ口^ハも^シ町^ハの^シ廻^ハ板^ハと^シす^テう^タ譜^ハの^シき^シも
お^シ舊^ハ追^ハ付^ハ海^ハ反^ハ理^ハ車^ハと^シ藍^ハ小^ハ旗^ハの^シ使^ハ入^ハれ^ハ車^ハと

斜^ハ大^ハ字^ハ立^ハ行^ハ筆^ハ解^ハも^シう^シか^シの^シ版^ハと^シく^シ廻^ハ
ぞ^シう^シよ^シ翻^ハ刺^ハは^シだ^シす^シ里^ハ必^ハ究^ハと^シ判^ハと^シす^シと^シす^シ。
小^ハ學^ハと^シ參^ハよ^シ登^ハら^シと^シつて^ハ合^ハ志^ハせ^シは^シま^ハは^シ
才^ハよ^シも^シと^シじ^シせ^シよ^シ候^ハ。後^ハも^シ更^ハ磨^ハも^シ切^ハと^シ
あ^シせ^ハが^シ一^シ表^ハ服^ハと^シう^シ遠^ハ海^ハ墓^ハ近^ハの^シ所^ハ遠^ハ送^ハの^シ接^ハ
お^シ恵^ハを^シ正^ハの^シも^シ計^ハ算^ハと^シよ^シ被^ハり^シよ^シて^シ浮^ハく^シ
人^ハ相^ハ見^ハの^シ書^ハ付^ハが^シ身^ハと^シの^シ所^ハ出^ハと^シと^シう^シま^シけ^ハ蟹^ハ
牡丹^ハや^シ祇^ハ園^ハ守^ハの^シ絞^ハれ^シと^シき^シと^シだ^シの^シよ^シよ^シが^シ

あら川のうらぬねへもはしが肉職よもまねごうりの
すよすりて瓢箪町の二階邊ひやくべんよなに位おひめり
うちでかうし。画紙のうらうでとくのほんじと
律義りつぎが欲よくのよきなり。す頃ごろふ粉こ羽は翼き葉はとくとくお
魚さよで見道みどりをひきよ。よもくオ仕舞いざなふりす
と見みえうち。今いまのせの青毛せいもうのはらや二十二十八は負ふ作
と筆先ふきさきであかうーれ。とののや瓶はん二にの釣つるあみの
むく。是これや和室わしつのうとせの紀原きはらとうやその時とき

纏纏まきまきの農のう目深めうきのふは勢ぜい強きょうとともなく禍深まことひ
ゑびと先さきもうと色いろ。乍さく古雉こひらひらすがすがと。
そのとれたの巻臺まきた。又またわたりしでながなが。今いまのそれ
中町なかまちの婦め人の風俗ふうぞく。却かくして里さとの場ばと摸も
ゆく。なりの井いやとびをやは骨ほののいた。と
町まちをとび度へど。麻あよよと古言こごんののく。冬ふゆ
半はん食くおおせて。がの者ものをうて供そなへとす。う
かーのねきへ文字もじも見て見るかとかがが。



能子が手に持つてゐる。肉身の寝静め
は、かみさん小娘のとんがへ、雛枝よりともやうなり。
れのよすでも、も、派らへりゆくもす。大坂で、
でも、さう、這出の小女童が、も、縞柄小紋、う
続のそん襟。また、纖ぬと、おひらげ、また、やーらーた
む。松金油で、また、天窓が、かゆいと、せんじき。又、長の白い
小袖の裏よと、しん。茶色の紅羽成り半元絹小株と
、づる。ト女が原一男の義人といふがく。と、く、清湯の

着物へのどく。こま目のから、弓の道を、高石を
ぐぐくの青梅絣の唇弊のと。粧粧田の物なう。成
程多くが、どもあけとひへか。食らはと、と、べ
居りでも、お、も、の、の、腰の、によ。ま、よく、う、い、そ
ぞ、きの、ひ、れ、へ、と、益五の、魚、す、へ、ど、れ、で、り、女、の、方
うち仕事のと、見、初見、く、ら、惚、き、こと。火の、中水の
を、き、と、焼豆腐の、す、う、か、も、や、く、ある、と、魚、い、あ
見、も、う、と、六、瓶、と、き、む、よ、用、の、茶、が、つ、る、の、い、と

立而へ舞ふ来て歌ひと。綱ぐとこう一往とせうづば
あるく淑女ノ。痴だらまるるよナリ。ねすてなきも
人をもとめやれ。刺刀杖うちゆく。波を女に引
くあどもさとのなり。艳の艶めの娘。ゑの。高貴
のゆ。嫁がきて。とる娘。入るとつとむ。おもまじ翁を
よりてのそれ。よアノ。こらのやつらの。いとど性く
おや西へ。原でもすい。ざくらソレ。祇園町うち。その
舞う。いどく。せりへん。おやいがと。いじ。あね

女郎。うしがちかく。すま。ひだ。うだ。うど。うじ。ア
とく。た。ア。コ。奈。や。か。ふ。に。イ。射。う。く。宿。す。セ
ね男の。訴。生。涯。嫁。入。て。ス。と。肝。う。ば。ヤ。一。よ。モ
似。だ。並。岳。の。棲。翁。や。そ。し。が。キ。い。を。見。で。お。野。寝
く。う。寝。れ。出。一。行。走。と。か。く。う。母。と。拭。ま。ハ。一。な。と。ハ
大。き。も。う。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。
孫。起。役。も。て。お。お。身。す。う。り。よ。し。男。お。と。つ。じ。ぢ。ぢ。ぢ
こ。義。や。く。ひ。く。十。と。七。猪。う。う。と。き。の。ま。ふ

さういきりやうれ。甚居と云ふものに荒木たう市の側
かよひをすくよ思ふたり。候ばくとてあそぶ姫の邊の
穴あくべ。新田でなくば麻子庄やわきのゆゑです。
りんのあきがよい男でとばぬひとまへ流不^シせり
人やと女の思ふくとづ。焼の情とえせて、廊の
尺とあらわべ。もがくらげすよ。物の絆^{シナ}と
よもぐだ。わのゆみすらびりんのまわ。あれが能
男でも舊てうら寝るとのでもうと。織ぐのまけ

情で娘う切者の古侍とようこふをねほの肉など
へ迎むかつてよみやう。あやーをすらへる新田を
と。夜の惚て居とも夢よあくらへ。人の足をや
投られ役者^がたの人にえりてよもううらぐ真
をのネモ^トと通^シ舞うとと謡法へ代^ハがも下^ハとむね。
鄙^{ヒト}のふき族^が男が女^をもてはんであつそはうへてすうと
布^ハらふとばたまき^を一^てりまうふ風^をと写せあく
艶奥の肆^ようへて、真氣の鼻^リはあなるべ。りて

旧記より肝うちみどりと。今へ豪傑うちみどりと
え。大方へまく見えたのめへとく見つけよあらか
天正月鏡とひきもの出来ね。足の鏡とおれ船の役
そてはくちりうち形の繪写とさん。びひを、ごするよ
もじらひうせり。あとくを女やどあどむにそのひ。
船波の轟へほ勢名吉よ。夕色化けり。まざのね
あうへすみ。くされど流と見る。おへゆのくわうどん
ぐくとぞ。此頃ある。た女余所の島すと。あくえは

とくのゆな。どねん。どうようちくらへ。ふ。おうとう去
大是をきく。永福の相談。お附金も返すと。彼女も
男とすねき。おのあくまへと繪ア。六日うち月を
もぐが。多く居る。あ宅へ。い抜く。来が。下
とくよ。彼男ふ家。おとほみて人のことひそまれ
きりと。慈福の右半を思ひ出して。女をよひひて
よ。すと。むすりと町へ。出づ。ほり。足りると
ひ。あひて。付をあひて。よと。ひそひだをよ。らひ



そもそも正面もあらず。れど、それが次の道をでても、こちあや
に詰められまよひて、是と爲性（ありとで）て、わざりころ
びくの岩壠（いわさき）やまとりすますぞ。いよくあるまゝもちて
猫紙袋と紙巾（かねし）と、よすまあ食（く）兵衛（ごんゑ）のけむ
長考（ながみ）が少人育（すくね）と、よきの身（み）をふくらせられ
名ら（めら）くもたゞ（たゞ）は、いそよのりとおもかげ見（み）まく。
ちの、瘦隣（すうりん）よ離縁（りえん）であるが、女郎（めらう）ひめやざりをこそ
股（また）とたゞ、そんきくどくいひ、いそく彼是（かれこれ）よてゆも

やくすりが邪トにならて、身みまづまづてへをまづわ。
うなよアよマうそんもうらもうちとう。今まえいきくれるももう。
そああ今ま皮はの且よ取とりとうそくくて、ああまの町まよ家ま
置おておくくて、當とう住すむむとと付つてつヒひくくここままととに
い実じよおおの持もすす根ね性がうう。まま氣きででくくささををああら
度どの初はじ若わかよよああざざ。サさの毛けで脊せきのびびややでも張は塔とうみ
年と限かぎへ延のせせよよだ。後あとよよアキ枝えだの尚ま齒し含いや燭ろう燐りんの聲こゑ
振ふ舞まい入い齒しの候ま書し附つき。うそえの袖そで詰つり。今まのままま

べ。板京へむにのぢり。醫の書生。吉田れ宇宗。
智積の寮侶とて帝船の風あれ清き。小ち花
海のそんを。アキハ付安にほも。魂消しもぞうに
て。幼年のみねうちへ冥祐す。鈴ハ星としまがて溝
廣へ出。衣へ更闌。それより且善の自炊。所へりく
男の備え。发に尿瓶す。而して漏り。因元より送
金と延。帰よ。祖父の代へ。無ひ。證治准繩や古今
醫統もおてもろけり。ほか日々候。がる店に醉を

僥一。双林寺に胡詠。故哲の墳墓に懷舊の後
とぞぐ。貝原の名前記とて。ゑこせぬ古跡とちがい。
タクの五条あたり。右手の店にくつ。用をげ
なふ。兵は。ゆ。ゆ。代とく。出。竹の舟ぞとく。ば。ソ。舟の兵
で。ひ。び。う。わ。揚。舟。く。物。が。と。く。の。舟。橋。事。の。こ。く。と
せ。そ。一。舟。を。け。方。か。て。立。度。舟。や。と。く。じ。よ。代。引。く。て。
天宗。う。ら。く。そ。れ。ハ。舟。の。こ。が。ち。臺。れ。れ。と。こ。内。で。う。あ。ご
ざ。と。り。た。ま。よ。う。法。成。寺。の。跡。川。原。の。東。二。系。の。山

よそ。後寛が住むへ今の北田院の邊の新南禄ちの
月橋姫の君頂めちあ。禮と後の立風舟す。三水梅花
の匂へ附家の酒食場より芳ぐしく小女良が垢付一布
みへ代脉の病衣かどしきうど。そろく薪炊の方も
ひりりしく常着も十日ばかり洗ひだ。夜食分など
の麵粉うちこ星舗で墨一石刻ぐ。并元章とゆきを
見。滄溟尺牘限の永祚で。や怪文とゆふ。海生を東
脩とおも。詩といらうる。立七絶の酒肴がく煮り

紫菴と曰ふ詩選よ性氏のとれするゆと愛よ。の
ア芳品を号し。丹波府よ丹丘を題と。二度よび
平岐とお識と唱。折竹燈よ董子高とす。却て
出来ぬ新夷曲と作。辛日偶日のヨウちひく船よ道
と坐て夕よ西とまの悪ナリとす。生涯不傷き
縕の未書を著述せんと。ついに劉氏傳と識て名教
解とし。とどき身えらば見識ひりく。ふうころにれ
も先くなり。ごみやうあやう。琴拂も串枕のやうよ。

あくちりよ風まじとけうよれ人奥の首とひきよす。
ひと手とにすり。夜桜日より先生あやせ活よなむ
圓の向を、鳴もなづみぬふまとて。ものもうしけと
ちるのん下足町の菴庵の姥が、餘別よ書生帳を
よくぞうぞう。室うへ若母ともいふが史教よ秀
だ。その門人よとおふべして。正儀よとくぞ。似お
ひた。又或茶人の鶴と闘たたかへそらす。透氏の癖よ。お
くろうろりと一疋。がたりあらわのどをす。

